松波むかし語り　ここに住み続けて　その３５

今回のお客様

80を過ぎて手仕事に掛ける情熱を失わない

田中（たなか）　茂（しげる）さん　82歳　4丁目

“町会の環境衛生部時代、防鳥ネットの取り付けでは苦労しました”

昭和４年、市原市の農家に生まれた田中さん、海軍予科練に志願し茨城県の百里基地で艦上爆撃機の操縦訓練を受けましたが、「一度も空を飛べずに」終戦を迎えました。「でも多くの先輩の乗った特攻機を見送りましてね」。そのため、退職後、靖国神社への参拝を続けてきました。

戦争が終わっても田中さんは、“何をしたら、お国のためになるか”との思いを持ち続け、戦後復興には物資の輸送が欠かせないと考え国鉄に入職しました。「電気の技術屋ですが、電気はよくわからなくて、神田にあるいまの東京電機大の夜間に通ったんです」。当時は食糧事情も悪く、独身寮ではコッペパンをかじりながら勉強したと言います。

卒業後、弥生小の先にあった千葉気動車区(全国初の気動車区として誕生。現在は西千葉公園となっている)に配属され、気動車のディーゼルエンジンとも格闘しました。「夏の海水浴シーズンには、両国から臨時電車が館山などに向かうのですが、千葉から先はまだ電化されてません。そこで千葉駅から電車をディーゼル機関車に引かせるのですが、トンネルの中で室内灯を点けるために発電機を載せた電源車をつなげるんです。よくその添乗をして往復しました」。県内路線の成田線・鹿島線が電化された昭和50年３月、千葉気動車区は廃止され、田中さんは幕張電車区に移りそこで定年を迎えて以後も車両整備の下請け会社に残り67歳まで勤め上げました。

仕事を辞めてからの田中さん、手仕事の習慣からかプラモデルづくりに凝ります。「飛行機を中心に5、60機つくったでしょうか。細かなエンジンの内部まで、磨いて色を塗って仕上げました」。その後も、牛乳パックや紙ひもをつかったバッグやメガネ置きづくりに熱を入れてきたのは、「ボケ防止」からだと笑います。町会では環境衛生部長を務めました。「防鳥(カラス)ネットの普及の始めで、千葉商から野球ネットを分けてもらったりして工夫をしたものです」。「健康法は歩くこと」だと田中さん。いまも毎日夕方、「千葉公園か千葉大を6000～7000歩」歩いているとか。月２回の４丁目の安全パトロールはいまも現役です。松波に越してきた昭和30年代は「夕方になると通りに縁台が出て、そこで子どもの育て方なんか教わったものです」、そうした隣近所の付き合いが、ひいては街の安全を支えていたことを経験で知っている方の言葉かと聞きました。

一式陸上攻撃機と零式艦上戦闘機（零戦）の細部をチェック

紙ひも細工は田中オリジナル